

雑誌名「十全」由来

Origin of "Juzen"

金沢大学名誉教授

西 田 尚 紀

金沢大学十全医学会誌は英文名として Journal of Juzen medical Society となっていてどこにも Kanazawa University や Kanazawa の名称は入っていない。雑誌刊行の機関が創刊以来医専、医大、大学医学部と変わるにつれて冠名が変わるか又は冠名略の時もあり創刊以来全く変わらぬのは「十全」の語句のみである。そして今確かに雑誌題名に金沢大学の名を冠しているがこれに続く十全医学会誌の文字に較べて小さく、添加物の感を与え、あくまで「十全」が主人であるかの様なスタイルを採っている。「十全」の名が雑誌名として始めて世に出たのは明治29年で十全会雑誌がその名称であった。この頃雑誌は学術誌ながら同窓会報、学友会報をも併せ持つ、云わば未分化の搖籃時代の誌名であった。この古い時代の名を純然たる学術誌になった今もそのまま保持しているのは全国的にも珍しいことかと思う。そして私は以下に「十全」の語句が医学校として断ち難い重要な意義を持つ故に大切に保持されていることをこの学術誌上を借り広く江湖の人に説明したいと思う。

十全という語句は中国周代 (BC 1000年の頃) の官制を記した周礼 (しゅらい) の中に出ており雑誌名はこれに由来する。以下周礼 (巻第二, 天官冢宰 (ちょうさい) 下) から引用する (以下, 原文に添って出来るだけ判り易く訳する)。

……医師は医療の政令を司る。そして毒薬を集めて医療に供する。凡そ我国の病人や傷を受けた者が治療を求める時、それぞれの医者に分けて治療を受けさせる。一年の終りに年間の医療実態を調べその上で医者 of 俸録を判定する。この場合十のケースのすべてを愈 (い) やす (十全) のを「上」とする。一割の失敗は十全に次ぐものと見なす。同じく二割、三割と次々にその失敗の度合を見る。そして四割失敗したとすればこれを「下」とする。……

この四割を「下」とする説明を鄭氏註によれば「五八則チ半ナリ、或ハ治セザルモ愈ユルナリ」とある。つまり五割治しても元々自然治愈が5割あるから5割は俸録外だというわけである。学校の60点以下落第システム

は3000年の歴史を持つらしい。

文章始めの「毒薬を集める」という語句は鄭氏註によれば「(毒薬とは) 薬ノ辛苦ナルモノ。常ニ多毒、孟子 (BC372-BC289 戦国時代の思想家) 曰ク、薬ニシテ瞑眩セズンバ厥 (そ) ノ疾、廖 (い) ヌルコトナシ」と。つまり薬を飲んで頭がクラクラッとしないう様なものならその効力は無いものと孟先生は言っている、ということで、まるで現在の癌治療薬の副作用を述べている感じである。

以上に述べた周礼の時代から更に2000年程経た宋の時代に程明 (1032-85)、程以川 (1033-1107) の兄弟学者があり、彼等の死後その言行録を著したものに「二程全書」があり、この中で上述の「十全」を敷衍 (ふえん) して次の如く記述されている。

「周官 (周礼と同義) に医は十全をもって上と為す、と。(然し) 十人皆愈ゆるを上と為すには非ず。若し十人不幸にして皆死病なれば奈何 (いかん) せん。但し、治愈可能と不可能なる者を知り十人に対する処置が皆当を得ておればこれを上とする」と。

治療可能と不可能を良く見わけることは現在学問の驚異的進歩によって数多くの病について克服されたと言つて良いが身边には尚沢山の病が解決されないまま取り残されている。それらの実態を知りこれを克服する様に更に勉強することが必要なことは昔も今も変りはない。医の「十全」が学術誌上に少しの光も失わないのはこの理由による。

上述の文で「十に一を失し、二を失した時……」と書いたが沖中重雄先生 (故人) が東大退官講義 (昭和38年4月) で誤診率 14.2% と話されたのは当時新聞雑誌で有名な出来事だった。これは750例もの剖検データと対比させた厳しすぎる位の判定現準——例えば、肝癌として治療したが死後の剖検病理診断では胃に原発した小さな癌 (これを見逃す) からの肝臓転移癌。治療としては変わらぬがこれも誤診とする——に由る。

かくて医学は限りなく難しいが「十全」を期すことに医の目標があることに変わりはない。